

『ロシアの北極海・シベリア探検－19 世紀とそれ以前の探検の性質の変容－』

3-S 出頭愛斗

0.はじめに

1.北極海とシベリアについて

1-1.北極海

1-2.シベリア

2.18 世紀末までのロシアの北極海・シベリア探検の概観

2-1.16 世紀まで

2-2.17 世紀

2-3.18 世紀

3.ヴィトゥス・ベーリング

3-1.第一次北方探検

3-2.第二次北方探検

3-3.これらの探検の意義

4.19 世紀の北極海・シベリア探検とその性質

4-1.19 世紀の探検事例

4-2.ロシアの国内情勢

5.結論

0.はじめに

人類は古くから探検をしてきた。その意図は、様々な利益の獲得であったり、人間の持つ好奇心を満たすためであったりと、様々である。中世ヨーロッパにおけるヴァイキングたちは新たな土地を探し求め、巧みな造船術と操船術をもって、北海や大西洋を駆け巡った。近世の幕開けを飾った大航海時代でも、香辛料の獲得、そして新たな領土の獲得のために、多くの偉大な探検が行われたのである。ヨーロッパだけではなく、太平洋のオセアニア地域でも、多くの民族によって、数千年に渡って島嶼部の探検、開拓が行われていた。人類の行った探検の数をあげようとすれば枚挙にいとまがない。そもそも、人類がアフリカから出立して世界各地へと散らばっていった過程、いわゆるグレート・ジャーニーそのものも、偉大な探検の連続であったと言えるかもしれない。

本論文では、そうした探検の中でも、ロシア地域、特にユーラシア大陸の北東に広がる大地、そして海洋で行われたものを扱う。つまり、シベリアと北極海で行われた探検に焦点を当てたものとなる。16世紀には、ロシア・ツァーリ国による東方の征服という形ではあったものの、コサックを中心にシベリア探検が行われるようになっていた。その中で、少しずつではあるが、その地域の実情が判明していった。17世紀には、ロマノフ朝が成立し、東方拡大も継続して行われ、北極海への航海も行われるようになった。18世紀には、ピョートル1世の戴冠をもってロシア帝国が誕生し、国家主導の探検が行われるようになった。この時代のシベリア探検としては、ヴィトゥス・ベーリングによるものが有名であろう。何世紀にもわたる探検によって、ロシアは現在にまで続く広大な領土を手にするようになった。

ロシアにおける種々の探検は、ベーリングのものを除けば、広く知られたものが存在しないように思われる。しかし、東方の征服や貴重な毛皮を求めることに主眼を置いていたコサックによる探検や、学術的関心や国威発揚といった面が強い国家主導の探検など、他地域で行われた探検に比肩するほどの面白さが存在していることは事実であるし、ロシアにおける探検がもたらしたのものにも注目に値する部分があると思われる。加えて、今現在、シベリアや北極海に集まる関心は高まりを見せている。シベリアは、以前から埋蔵している資源が豊富であると言われてきたが、地球温暖化のもたらす永久凍土の溶解によって、資源採掘が容易になる可能性が指摘されているし、北極海も同様に、地球温暖化による氷の減少が、スエズ運河とマラッカ海峡にかわる貨物船の運航ルートとしての使用可能性を高めているなど、多くの国の注目を集めている。これらの地域を探検という観点から歴史的に眺めることによって、現在の状況を改めて理解することができるのではないだろうか。

本論文では、第1章で北極海とシベリアの地理的・歴史的特徴について説明する。そして、第2章では19世紀以前に行われた探検について触れ、第3章ではベーリングによる探検を述べた上で、19世紀以前の探検の性質について考察したい。そして第4章では19世紀の探検と、ロシアの国内事情について述べ、第5章では結論をまとめる。本論文によって、シベリアと北極海について、その中でもとりわけ探検について、読者諸氏が新たな知見を得られるのであれば、筆者としては望外の喜びである。

1.北極海とシベリアについて

1-1.北極海

本章では、北極海とシベリアの概要について述べる。北極海とは、ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の北方に存在している広大な海洋のことである。なお、北極海には北アメリカ大陸側に存在するグリーンランド海やハドソン湾なども含まれるが、本論文はロシアに焦点を当てる都合上、北極海という語を使用する際には、ロシアの北部に広がる白海、バレンツ海、カラ海、ラプテフ海、東シベリア海、そして、東部に存在するベーリング海を主に指すものとする。1年を通してその大部分は氷に覆われている。なお、1年間に1日以上極夜、もしくは白夜が生じる緯度線(北緯66度33分)にあたる地域は北極圏と呼ばれ、北極圏から北極点にかけての地域のことを北極帯と言う。北極帯には、シベリア北部、グリーンランド、スカンディナヴィア半島の大部分、アラスカなどの地域が含まれている。北極帯の総面積は2130万平方キロメートルにもなり、その3分の2(約1400万平方キロメートル)を北極海が占めている。これは南極大陸(約1500万平方キロメートル)とほぼ同等の面積である¹。

北極海には多くの島嶼が存在している。地球上で最も新しく発見されたセーヴェルナヤ・ゼムリヤやソ連時代に核実験が行われたノーヴァヤ・ゼムリヤ、オーストリアによって発見されたゼムリヤ・フランツァヨシファ、自治政府のあるスバルバル諸島、ノヴォシヴィルスク諸島などが知られている。その内の大部分は人が居住するのに適しておらず、軍事基地や観測所を除けば、野生生物が生息しているに過ぎない。かつての米ソ冷戦期には、両国ともに北極海を挟んでICBM(大陸間弾道ミサイル)を向けあい、互いにけん制する状態が続いていた。今現在でも、軍事上の機密という観点から立ち入りが制限されている島嶼が存在している。

1年中氷に閉ざされているため、北極海は船舶の運航にはあまり適していない。そのような過酷な環境ではあるが、探検の歴史は中世までさかのぼる。8～12世紀頃、地球は温暖期に突入したため、北極海周辺の環境も比較的穏やかであった。当時の探検は主にヴァイキングによって行われた。現在のスカンディナヴィア半島を中心に活動していたヴァイキングは、巧みな造船技術や操船術によって、交易や漁業を盛んに行っていた。諸王国が乱立していたイングランドに何度も遠征をしかけ、ヴァイキングによる王国が築かれたこともあった。そのヴァイキングによる探検の歴史は「サガ(アイスランド語:saga)」と呼ばれる史伝によって伝えられている。880年頃のヴァイキングの酋長オットアルによるノルウェー沖から白海までの航海や982～985年の赤毛のエイリークによるグリーンランド入植が、サガに記録されている²。

¹ 南極 OB 会編集委員会編(2015).『北極読本—歴史から自然科学、国際関係まで』. 成山堂書店. 2-3 頁

² 南極 OB 会編集委員会編(2015).『北極読本—歴史から自然科学、国際関係まで』. 成山堂

その後の北極海探検は、主にイギリスやオランダによって行われた。まずイギリスでは、15 世紀末から 16 世紀初めにかけて、カボット親子がカナダ東部のニューファンドランドを発見していた。父であるジョン・カボット(John Cabot. 1450 頃-1498)は、国王ヘンリー 7 世の命を受け、ニューファンドランドを発見し、子のセバスチャン・カボット(Sebastian Cabot. 1474 頃-1557)はニューファンドランドを再発見し、北西航路の開拓の基礎を築いた。その後、17 世紀初めには、ヘンリー・ハドソン(Henry Hudson. 1560~70 頃-1611)がハドソン海峡を発見し、ハドソン湾を探検した。そしてハドソンは北緯 80 度にまで到達した。オランダでは、1594 年にウィレム・バレンツ(蘭: Willem Barentsz. 1550 頃-1597)がカラ海に到達し、ノーヴァヤ・ゼムリヤ西岸にたどり着いた。1596 年の探検では、スピッツベルゲン島(現スバルバル諸島)を発見した。そしてノーヴァヤ・ゼムリヤで越冬し、同地で命を落とした。その後、イギリスやオランダの注目はアメリカ、アフリカ、アジアにおける植民地経営に移り、北極海への探検はあまり行われなくなった。そして、ロシアによる北極海探検が行われるようになった。この詳細は第 2 章で述べる。

20 世紀になってからは、ロシア革命によって成立した革命政府によって、砕氷船による北極海の航行やセーヴェルナヤ・ゼムリヤの発見が成し遂げられ、ヨーロッパから極東地域への移動に際して北極圏が使用できないかの調査も行われた。

近年では、地球温暖化の影響で船舶の運航が容易になり、北極海を使った商用航路である北極海航路への関心が高まりつつある。現在使用されているスエズ運河やマラッカ海峡を通過するルートよりも短時間、低コスト、低リスクの物流を可能にするものとして、多くの国々の注目を引いており、特に中国では一帯一路政策に北極海航路が組み込まれている³など、寒くも熱い地域であると言えよう。

1-2. シベリア

シベリアは、ロシアのウラル山脈以東からオホーツク海に至る地域である。その面積は 1276 万平方キロメートルにもなり、ロシア連邦の 4 分の 3 を占める。サヤン、スタノヴォイ、コルイマなどの山脈や、オビ、レナ、イェニセイ、アムールなどの大河が存在する。東西だけではなく、南北にも幅があるため、植生はツンドラ、森林ツンドラ、森林ステップ、ステップなど多岐にわたり、自然の豊かな地域としても知られている。しかし、前項でも述べたように、シベリアの北部は北極圏の一部にもなっており、加えて大陸性の気候のため、冬期の寒さは厳しい。1926 年に、北半球で最も低い気温である -71.2℃を記録したオイミヤコンもシベリアに存在している。

書店. 122-123 頁

³ “中国 北極海でも「一帯一路」 権益拡大へ白書発表”. 日本経済新聞. 2018-01-26.

<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO26195000W8A120C1EA1000/>, (閲覧日 2021-12-02)

厳しい気候ではあるが、シベリアは50万年ほど前から人類が進出していたことが明らかになっている。大きな文明や国家が形成されることはなかったものの、多くの少数民族が居住している。シベリア南部は、紀元前3世紀前後にはフン人の支配するところとなり、その後も、テュルク、モンゴルなどの諸遊牧民族の支配下に置かれるようになった。ロシア人のシベリア進出は、11世紀になるのを待たねばならなかった。西シベリア地域は、毛皮を求めるノヴゴロド商人によって少しずつ開拓されるようになり、13世紀にはノヴゴロド公国の支配下に入った。その後、モスクワ大公国が成立し、16世紀のイヴァン4世の即位後には、シベリア進出は加速していった。特にイヴァン4世治下におけるコサックの活躍が、シベリア進出を容易ならしめたのであり、イェルマークによる遠征はよく知られている(2-1を参照のこと)。16世紀中頃には、チュメニ、トボリスクといった拠点が築かれ、17世紀前半には、レナ川河畔にヤクーツクが建設された。そして1639年にロシアはオホーツク海に到達し、東シベリアをその勢力圏に収めた。わずか200年程度でシベリア進出を成し遂げたロシアは、シベリアの調査やさらなる東方への拡大のため、18世紀にはベーリングによる探検などを実施した(2-2を参照のこと)。19世紀になると、シベリア全体の統治のため、トボリスクに西シベリア総督府が、イルクーツクには東シベリア総督府がそれぞれ置かれ、農民の移住政策が度々行われるなど、シベリアの経営が進められていくことになった⁴。ロシア革命後には、革命政府は民族自決を重視したため、シベリアに存在する少数民族にも自治を認め、多少の変遷はあったものの、シベリアには自治共和国や自治管区、自治州などが成立することになる。

ロシアによるシベリア進出は、ひとえにシベリアの富を求めてのことであった。コサック達はシベリアの毛皮を手に入れようと躍起になっていた。キツネ、クロテン、ラッコ、オコジョなど、非常に高価な毛皮が大量に入手できるシベリアは、まさにフロンティアとして、ロシア人たちの前に広がっていたのである。しかし、毛皮以外にもロシアは多くの資源が豊富である。西シベリア平原は石油と天然ガスが豊富であり、東シベリアは石炭が豊富である。加えて、銅、亜鉛、ニッケル、ダイヤモンド、アルミニウムなど、シベリアには多くの非鉄金属の鉱床が存在している。特に天然ガスは欧州にも輸出され、ロシアの経済を支えている。昨今のロシアとウクライナ間の危機においても、ロシアによる天然ガス輸出が停止されてしまうことを恐れて、ドイツはロシアに対して強気な姿勢をとれないでいるなど、ロシアはその資源の力で国際政治にも大きな影響力を有していると言える⁵。さらに、温暖化による永久凍土の縮小が、埋蔵している資源の開発に拍車をかけており、シベリアの重要性が認識

⁴ 土肥恒之著(2016).『興亡の世界史 ロシア・ロマノフ王朝の大地』. 講談社学術文庫. 274-275 頁

⁵ “年内に脱原発達成のドイツがEUで孤立し始めた訳 エネルギー価格高騰に加え、外交でも苦しい立場”. 東洋経済. 2022-01-21.

<https://toyokeizai.net/articles/-/504519>, (閲覧日 2022-1-27)

し直されている。

2. 18 世紀末までのロシアの北極海・シベリア探検の概観

本章ではロシアの北極海・シベリア探検について述べていく。イギリスやオランダによる北極海探検が下火を迎えた後、ロシアがそれに代わるように探検を行うようになっていった。ロシアによる探検は、毛皮の獲得や学術調査、領土の拡大などの意図のもと、17 世紀から 18 世紀にかけて盛んに行われ、多くの成果を残した。ロシアのシベリア東進を支えたコサックの活躍や、多くの探検家の活躍は目を見張るものがある。

2-1.16 世紀まで

ロシアの探検は毛皮の獲得と密接に関わっていた。中世のノヴゴロド国においては、毛皮商人によって、シベリアや北極海を伝っての探検が行われており、オビ川の河口にまで到達した。加えて、ポモールと呼ばれる白海沿岸に住むスラヴ人たちも、北極海沿岸を船によって航海し、オビ川の河口にマンガゼヤ(Мангазея)と呼ばれる居住地を築いた⁶。

探検が本格化するのはイヴァン 4 世の時代からである。1533 年にモスクワ大公に即位し、ツァーリの称号を用いたイヴァン 4 世は雷帝と呼ばれ、専制の強化や各種の征服事業を行った。いわゆる「タタールのくびき」を脱した後も、ロシアは、いくつものハン国の騎馬部隊による侵攻を受けていた。そのため、イヴァン 4 世は国家の安全を守り、さらには領土の拡大を企図し、カザン・ハン国やアストラハン・ハン国の征服を行った。そして、1581 年に、前述のポモール出身の富豪であるストローガノフ家の援助のもと、コサック部隊約 1500 人に、シビル・ハン国攻撃の命を下した。コサック部隊を率いていたのはイェルマーク(Ермак Тимофеевич. 1532(42)-1585)と呼ばれる人物である。東進するイェルマークとその部隊は、シビル・ハン国との間で戦闘を繰り返し、彼自身も戦いで命を落とした。しかし、ロシアはシビル・ハン国を撃退することに成功し、イルティシ川沿いの要衝に砦を築いたのを手始めに、次々と要塞を築いていった。そして、1587 年にはトボリスクが建設され、初期のシベリア行政の中心地として機能することになった⁷。

2-2.17 世紀

17 世紀に入ると、ロシアはさらに東を目指すようになったが、そこには引き続き、コサック達の活躍があった。彼らはシベリアに存在する川をうまく用いることで、広域にわたって移動することができた。その中でも大きな功績をあげたのは、セミヨン・デジニョフ(Семён Иванович Дежнёв, 1605?-1673)である。セミヨン・デジニョフの前半生はよく分かっ

⁶ 加藤九祚著(1994).『シベリアの歴史』.紀伊國屋書店. 73-74 頁

⁷ 土肥恒之著(2016).『興亡の世界史 ロシア・ロマノフ王朝の大地』. 講談社学術文庫. 53-57 頁

ていない。北ロシアの港町であるヴェリーキー・ウスチュクの農家に生まれ、1630 年にはコサックとしてトボリスクで勤務し、後にエニセイスクに移った。彼が行っていたのは、非ロシア系住民から毛皮や家畜などを現物税として徴収することであった。この当時のシベリア・コサックは、手に入れた税の一部を自らのものとして懐に入れることができた。しかし、デジニョフは武力をもって無理矢理税を徴収することはなく、武力を用いるのは敵対部族の襲撃の際だけであったと言われる⁸。そのため、彼は税として毛皮を求めるだけでなく、さらに東の地域へと遠征と探検を行い、より多くの毛皮を手に入れようと計画したのである。1648 年 6 月 20 日、コルイマ川(シベリア北東部を流れ東シベリア海に注ぐ川)から、デジニョフを含むコサック、猟師、商人ら 90 人が 7 隻の船に乗り込み、北極海に出て東に針路をとった。8 月にはベーリング海峡に到達したと考えられるが、3 隻はその道中で座礁したと言われる。さらに、ベーリング海に到達した後、もう 3 隻が難破してしまい、デジニョフの乗った船のみが、チュクチ半島の南西 900 キロメートル地点に辿り着き、コリャーク山脈を横断して 12 月初旬にアナディリ川(シベリアから東へと流れてベーリング海に注ぐ川)河口まで到達した。当地で越冬した後、1649 年の初夏に、船を何隻か作り、アナディリ川上流へのぼった。そして、現地人から毛皮の徴収を行いながら、アナディリ川流域の地図を作成し、自然環境の記録を行うなどしながら探検を続け、毛皮だけでなく、セイウチの生息地を発見し、莫大な富を手にするようになった。アナディリ川での探検は 1660 年に終わった。陸路でコルイマ川に到達し、1662 年の春にはヤクーツクに着き、9 月にモスクワに到着した。ツァーリのアレクセイ・ミハイロヴィチによってデジニョフは、長年に渡る徴税任務や探検に対する俸給が支払われ、コサックの頭領(アタマン)に任ぜられた。その後もシベリア地域での毛皮の獲得を幾度となく行い、1673 年に亡くなった。

デジニョフの探検から分かるのは、アジアとアメリカが陸続きでないことが発見されたということである。セミヨン・デジニョフの探検にさかのぼること 10 年前、イヴァン・モスクヴィチン(Иван Юрьевич Москвитин. 生没年不詳)によって、シベリアの横断とオホーツク海の発見はなされていたが、ベーリングによる探検のおよそ 1 世紀前に、デジニョフがこの発見を成し遂げたことは大きな功績であると言えるであろう。彼の功績を称えて、チュクチ半島にあるユーラシア最東端の岬はデジニョフ岬と呼ばれている。

2-3.18 世紀

18 世紀には、ピョートル 1 世が元老院と宗務院から皇帝(インペラートル)の称号を贈られ、1721 年にロシア帝国が成立した。開明的な皇帝であったピョートル 1 世のもと、多くの改革が行われたが、探検も国家事業としてなされるようになっていった。主役はコサックではなく、海軍の軍人や外国人であった。中でも著名なものは、ベーリングによる 2 度の探

⁸山路明日太著「北氷洋から太平洋への海路発見ーデジニョフとポポーフー」(中京大学社会科学研究所ロシア研究部会編『ロシアのシベリア進出史』成文堂. 2011 年. 78 頁)

検であるが、その詳細は次節に譲ることにして、本項ではその他の探検に焦点を当てたい。

まず、外国人による探検としてあげられるのは、ドイツ人のダニエル・メッサーシュミット(独: Daniel Gottlieb Messerschmidt. 1685-1735)によるものである。ダンツィヒ(現ポーランドのグダンスク)で生まれた彼は、イェナ大学医学部で医学、動物学、植物学を修めた。その学識はピョートル 1 世に知られるところとなり、彼はピョートル 1 世の招聘を受けて、ロシアの地を踏むこととなる。そして、1719 年に、シベリアの珍しい物品や植物採取のための探検を命ぜられた。1721 年にトボリスクを出立した後、イルティシ川を經由し、トムスク、イェニセイスク、イルクーツク、ネルチンスクを巡って、アムール川上流をまわり、再びトボリスクに到着した後、1727 年にペテルブルクへと帰還した。探検の途中で入手した貴重な品々はクンストカメラに収められ、彼自身が残した先住民の言葉の記録は、後の言語学に重要な役割を果たすことになる⁹。

このメッサーシュミットの探検に同行したのがスウェーデン人のストラレンベルグ(瑞: Philipp Johan von Strahlenberg. 1676-1746)である。彼はボンメルンのストラルズンドで生まれ、軍人の道を歩んだ。実務経験を積む中で、製図法や自然地形に関する知識を身に着けたと言われる。北方戦争のポルタヴァの戦いの後、ロシア軍の捕虜となり、トボリスクに送られた。当地で地理や先住民族の記録をとりながら、地図の作製も行った。そして、短期間ではあるものの、メッサーシュミットの探検に加わった後、1723 年にスウェーデンへ帰国した。故国では精力的にシベリアの地図の作成と出版を行い、1730 年に『ヨーロッパとアジアの北東部』、『ロシア帝国と大タタリ全図』をストックホルムで刊行した。ストラレンベルグの出版物は不正確な部分や誤りも含んではいたものの、シベリアの歴史や地理、民族についての貴重な資料として、初期のシベリア研究の基礎となった¹⁰。

海軍の軍人として探検にあたった人物で名前が知られているのは、ドミトリー・ラブテフ(Дмитрий Яковлевич Лаптев.1701-1771)とハリトン・ラブテフ(Харитон Прокофьевич Лаптев.1700-1763)の兩人である。この二人はいとこ同士で、ロシア海軍に所属していた。ベーリングによる第二次探検隊に同行し、ドミトリーはチュコト半島の海岸線のマッピングを行い、ハリトンはセミヨン・チェリユスキ(Семён Иванович Челюскин,1700?-1764)とともに、レナ川からコルイマ川の沿岸探検を行った。ラブテフ海の名称はこの二人にちなむ。

同時代の海軍軍人として探検を行った人物として、ヴィトゥス・ベーリングがいるが、その詳細は次章で述べることとする。

3. ヴィトゥス・ベーリング

ユーラシア大陸とアメリカ大陸を隔てる海峡がベーリング海峡であるということはよく知られたことであるが、その名前のもとになった探検家であるベーリング(露: Витус

⁹ 加藤九祚著(1974).『シベリアに憑かれた人々』. 岩波新書. 16-24 頁

¹⁰ 加藤九祚著(1974).『シベリアに憑かれた人々』. 岩波新書. 11-15 頁,25-30 頁

Ионассен Беринг. デンマーク語: Vitus Jonassen Bering. 1681-1741)についてはあまり知られていない。

ベーリングはデンマークで生まれ、後にオランダのアムステルダムで学生として過ごし、東インド会社の船員として働くなどした後、ロシア海軍に入隊した。この時代のロシアは、ピョートル1世の統治下で、スウェーデンとの間で大北方戦争を繰り広げていた。ベーリングもバルチック艦隊に所属し、戦いに加わることもあった。1721年にはロシアの優勢の中で大北方戦争は終結し、ロシアはその威信を高めた。

ピョートル1世は西洋各国と比べて遅れたロシアを根本から改革することを望んでいた。西欧各国の視察では、多くの進んだ制度や技術を目にし、大きな衝撃を受けた。中でも、オランダやイギリスの造船術にはひと際興味を示し、偽名を使い、大工として造船に従事した。

国外での脅威が減退した後、ピョートル1世はさらなる威信と領土を求め、シベリアや北極海の探検に力を注ぐこととなった。加えて、かつて親交を深めた哲学者ライプニッツ(独:Gottfried Wilhelm Leibniz. 1646-1716)との間で交わされた、アジアとアメリカが陸続きか否かを明らかにするという約束を果たすことも、探検を進めることになった一因とも言われている。そこで、探検の総指揮を執る者として白羽の矢が立てられたのは、東インド会社やロシア海軍での経験が豊富なベーリングであった。1724年、ピョートル1世は病床で、以下の命令書を記した。

1. カムチャツカ、または他の場所で船を一隻または二隻建造すること。
2. 建造した船で北へ向かい、アメリカ海岸の一部と思われるところを航海すること。
3. アメリカとの接続地域をつきとめること。ヨーロッパ諸国の管轄下にある定住地へ航海し、ヨーロッパの船に出会ったら海岸名を聞き出し、地名を記録し、上陸し、情報収集して地図を作成して戻ること。¹¹

この命令書を作成した1か月後の1725年、ピョートル1世は亡くなった。しかし、この命令書に従って、ベーリングによる探検、いわゆる第一次北方探検が行われることとなる。

以下の項では二度に亘って実施されたベーリングによる探検(北方探検)について述べていく。

3-1. 第一次北方探検

ピョートル1世の命令書を受領したベーリングは、資材と隊員とともに、東へと出発した。目的地であるオホーツク港へはおよそ9000キロの道のりであった。船に積む大砲、砲

¹¹ スティーブン・R・バウン著. 小林政子訳(2020). 『青狐の島 世界の果てを目指したベーリングと史上最大の科学探検隊』. 国書刊行会. 39 頁

弾、帆、錨、鎖、造船用の釘など、荷馬車 33 台分もの資材を運びながら、小道すら満足に整備されていないシベリアを進むことは大変な困難であったものの、出発から 1 年半後の 1726 年 10 月 1 日にオホーツクに到着した。

しかし、当地には隊員用の住居や資材を保管する倉庫などが皆無であり、探検隊は一から探検に必要な環境を整備しなければならなかった。加えて、遠洋航海に適した船もなかったため、港にあった建造途中の船の完成を急ぎ、1727 年になってようやく一隻を完成させることができた。だが、この船も遠洋航海が不可能であることが分かったと、ベーリングはカムチャツカ半島の東岸にあるニジニ・カムチャツクを目指すことになった。

探検の開始から 3 年後の 1728 年 3 月 11 日によりやくニジニ・カムチャツカに到着し、新たな船である聖ガブリエル号の完成を待つことになった。聖ガブリエル号は全長 18 メートル、幅 16 メートル、竜骨から甲板までの高さは 2 メートルにもなる船で、6 月 9 日に進水し、装備や糧食を積み込み、ベーリングら 44 人は 7 月 14 日に北を目指して出帆した。そして 7 月末にアナディリ川河口を通過した。そしてさらに北へ行くと、広い海洋に出くわしたのである。

その後、船員の間では、船の進路をどうすべきかについて話し合いの場が持たれた。さらに北へ進路をとり、コルイマ川を目指すことを主張する者、帰還を主張する者などさまざまであったが、ベーリングはアジアとアメリカの間には海峡が存在することがすでに明らかになったと結論づけ、船を反転させて、9 月にはカムチャツカ河口に到着し、ニジニ・カムチャツカで越冬した後、1729 年 7 月 23 日にオホーツクへ帰還し、1730 年 1 月 11 日にはトボリスクを経て、同年 2 月 28 日にペテルブルクに着いた。

第一次探検は、隊員 15 人の死と馬 660 頭の犠牲を出した。しかも、探検の道中での物資の徴収や先住民の酷使がシベリアに与えた影響は大きく、ヤクーツクでは暴動が発生するなどの結果を生み出した。加えて、ピョートル 1 世の命令書の遂行度合いが低いのではないかと元老院から非難された。肝心のアジアとアメリカが陸続きか否かという疑問も完全には解明できていなかった。しかし、ベーリングはカムチャツカ半島南東部の地図を作成し、港にできる湾も発見することができた。様々な要因から、第二次探検が必要であろうことがすぐに明らかになったため、ベーリングは次の探検に備えて、計画を練り始めたのである。それはペテルブルクに帰還してから間もない、1730 年 4 月末のことであった。

3-2.第二次北方探検

ベーリングが第一次探検に出ていた間、首都の政情は目まぐるしく変化していた。ピョートル 1 世の跡を継いで皇帝となったのは、その妻であったエカチェリーナ 1 世である。しかし、この女帝は 1727 年に死去し、さらに後を継いだピョートル 2 世は、ベーリングのペテルブルク帰還の直前、1730 年 1 月 19 日に死去した。そして新たに即位したのはピョートル 1 世の姪で、クールラント(現在のラトビア地域)に嫁いでいたアンナ・イヴァノヴナであった。彼女は、国政にあまり関わろうとしなかったものの、ピョートル 1 世の政策を継承し

た。それは、探検による領土拡大や科学的調査の継続を意味したのである。そのため、1732年4月17日に探検準備の命が下され、同年12月28日に最終的な任務が提示された。

第二次北方探検は、その規模の大きさから、大北方探検と呼ばれることもある。ベーリングの計画には、第一次探検で達成できなかった点を補完することが含まれ、ロシアの国力と科学力を世界に示すことも目的とされた。さらに、ロシア人のオホーツク定住、辺境の前線基地への初等教育機関と航海学校の設置、遠洋航海船用の造船所の建設、地域活動の活発化など、多くの目標も盛り込まれた。1733年から1743年の10年にもわたる探検には、のべ3000人以上の科学者、学生、画家、測量技師、海軍士官、兵士、熟練職人などが従事した¹²。

第一次探検を優に超す人員や物資の管理、編成に大きく手間取った後、探検隊は、1733年3月6日から7日にかけて、4班に分かれて出発した。ベーリング自身は4月18日に出発し、7月17日にカザン、11月にはエカチェリンプルク、12月にはトボリスクに到着した。そして1734年10月には、探検隊の当面の基地に指定されていたヤクーツクに到着し、ベーリングは当地で3年もの歳月をかけて、航海の準備をすることになった。しかし、大量の人員と物資の移動には多大な困難が伴い、現地当局と揉めることもたびたびであった。こうした事態が、後の航海における犠牲者の増大を招いたとされている。

ベーリングが多大な困難をどうにか処理しようと奮闘していた中、オホーツクに到着した先遣隊は、航海用の船を建造し始めていた。完成したのはアルハンゲル・ミハイル号とナジェージダ号の2隻である。そして、第一次探検で使用された聖ガブリエル号ともう1隻が修理され、当初は以上の4隻が航海に用いられた。ベーリングはまだヤクーツクに留まっていたが、第一次探検にも参加し、現地の指揮を執っているシュパンベルグ(デンマーク語: Martin Spangberg. 生年不詳-1761)によって、第二次探検最初の航海が1738年7月13日に行われた。千島列島を南下し、島数を数えた後、帰還した。最初の航海で得られたものは少なかったが、翌年の5月21日には再び航海を行い、6月14日に日本の海岸を見つけた。22日には北緯37度30分、海岸から少し離れた地点で投錨し、小船で向かってくる日本人たちと交流した。この出来事は日本側の記録にも残っており、「元文の黒船」と呼ばれている¹³。

このシュパンベルグらによる日本近海の報告がペテルブルクにもたらされると、政府はベーリングに探検をするよう幾度か催促を行った。新たな船である聖ピョートル号と聖パーヴェル号の完成後、1740年9月、ようやくベーリングは航海を開始し、第一次探検時に発見した良湾であるアバチャ湾に寄港し、その地をペトロパヴロフスク港と名付けた。ベーリングは当地で物資の輸送を行いながら越冬した。そして1741年6月4日、聖ピョートル号と聖パーヴェル号は港を出立し、北緯46度まで東南東に進み、陸地の存在の有無が判明

¹² スティーブン・R・バウン著・小林政子訳(2020).『青狐の島 世界の果てを目指したベーリングと史上最大の科学探検隊』.国書刊行会. 70-71 頁

¹³ 加藤九祚著(1974).『シベリアに憑かれた人々』. 岩波新書. 81-84 頁

次第、東北を目指すことになった。ベーリングは聖ピョートル号に乗り込み、そこには博物学者のゲオルグ・ステラー(独: Georg Wilhelm Steller. 1709-1746)も同乗していた。しかし、濃霧のために、両船ともに互いを見失い、聖ピョートル号は7月20日にアラスカ南岸に、聖パーヴェル号は同時期にアラスカ南東部に到達することになった。

この頃には、ベーリングは健康を損なっており、帰還を急いでいた。誰に相談することもなく、明7月21日にカムチャツカに引き返すことを厳命した。しかし、ステラーはアラスカに上陸することを強く望み、短時間ではあったが現地の植物160種を採取することに成功し、先住民の生活の痕跡があったことも記録した。そしてカムチャツカへの帰還を目指す航海が始まった。帰還の途上において、ベーリングは完全に病気になってしまい、さらに不運なことに、9月25日から台風が吹き荒れ、探検隊は這う這うの体でなんとか無人島にたどり着いた。しばしの休息の後、再びペトロパヴロフスクに戻ることに決定されたが、暴風のため、岸に停泊していた聖ピョートル号は大破してしまった。穴を掘り、その上を船の帆で覆うことで、隊員たちは寒さをしのいだ。そしてベーリングは12月8日に亡くなった。60歳であった。その遺体は敬意をもって板に括り付けられ、埋葬された。

ベーリング亡き後の探検隊は、大破した聖ピョートル号の残骸を利用し、新たな船を作り、1742年8月10日、ペトロパヴロフスクへ向けて出発し、同月27日に到着した。アラスカ南東部に到達した聖パーヴェル号は1741年10月12日にカムチャツカに帰還し、1742年夏に航海を再開したが、暴風に遭遇したため、同年7月1日に再び帰還した。同年、女帝アンナは亡くなり、その従姉妹であるエリザヴェータが皇帝に即位した。ピョートル1世、アンナと同様に、引き続き科学の振興に努めたものの、1743年に提出された第二次探検の報告を受けた後、元老院を通して、9月25日に探検隊の解散を宣言させた。

3-3.これらの探検の意義

以上、ロシアにおける探検事例とその概略を示した。18世紀以前の探検と18世紀の探検にはそれぞれ違った意図が存在していたということが指摘できよう。18世紀以前の探検には、毛皮などの利益を追い求める面と、征服を行うという2つの面が存在している。毛皮商人やコサックの活躍があったのである。対して、ベーリングに代表されるような18世紀の探検は、国土の拡張という面もあったが、ドイツ人メッサーシュミットやスウェーデン人ストラレンベルグや、ベーリングとともに航海を行ったステラーといった人物や、ベーリングの第二次北方探検の目的や多様な人材の動員に見られるように、国威の発揚や科学の振興といった面が強く出ている。そして、探検を行った主体も変化した。18世紀以前の探検ではコサックや毛皮商人の自発性があったが、18世紀の探検は、軍人や学者が国家の命で行うケースが多い。

時代によって探検の意図が異なっていたことは指摘できるが、これらの探検がもたらしたものは一体何であろうか。1つには、広大な領土の獲得があげられる。16世紀中頃のロシアは、イヴァン4世の治世下で、ウラル山脈にまで領土を広げた。17世紀の初頭には、諸

ハン国を併合し、カザン・ハン国の首都のカザンを支配下に置くばかりか、ウラル山脈以東のオビ川流域にまで勢力を広げ、トボリスクを建設するに至った。そして、18 世紀前半までには、シベリア一帯を自らの領土とすることに成功し、現在に続く広大な領土の基礎となった。イェルマークによる東方征服や、ベーリングとその前後の時代の探検家たちの探検の成果が領土獲得の一面をなしていることが理解できよう。

4.19 世紀の北極海・シベリア探検とその性質

本章では、ロシアの北極海・シベリア探検が 19 世紀になってから性質が変化した理由を考察する。探検事例と国内情勢を踏まえて考察する。

4-1.19 世紀の探検事例

19 世紀の探検事例を見ていきたい。この時代には、北極海・シベリアに留まらず、世界周航や中国の西域探検など、探検範囲が広がった。ロシア国内の探検について触れてから、それ以外の地域の探検も併せて見ていきたい。

19 世紀にも、引き続き探検は行われていた。著名な国内探検の事例としてあげられるのは、1855 年から 1863 年の 8 年に亘って行われた大シベリア遠征である。探検が行われる契機となったのは、1845 年の帝立ロシア地理学協会の設立である。

地理学協会は、ヨーロッパにおける植民地獲得競争の流れを汲むものであり、1828 年にはベルリンに、1831 年にはロンドンに設立され、各国ともに、自国内や植民地にその支部を広げていった。ロシアもその例に漏れず、国内に支部を続々と設立していった。1850 年にはカフカース支部、1851 年にはイルクーツクにシベリア支部とヴィリニウスに北西支部、1868 年にはオレンブルク支部、1873 年にはキエフに南西支部、1877 年にはオムスクに西シベリア支部がそれぞれ設立された。ロシア地理学協会設立時の皇帝はニコライ 1 世であった。この時代には、官僚制の拡充が行われ、ピョートル 1 世時代から進められていたバルト・ドイツ人の高級官僚への登用も積極的になされていた¹⁴。そのため、ロシア地理学協会にも、バルト・ドイツ人が多く加わっており、探検を主導することもあった。そして、ロシア地理学協会には、当時のロシアの知識人が多く参加していたとされており、東シベリア総督のムラヴィヨフ(Николай Николаевич Муравьёв-Амурский. 1809-1881)もその一員であった。そのムラヴィヨフが強力にシベリアへの探検を唱え、結果として大シベリア遠征につながったのであった。

大シベリア遠征の目的は、ロシアの「地理」を明確にすることにあり、東シベリアと極東地域の探検が主目的とされた。様々な探検が行われた中で、最も特筆すべきは、サハリン島探検である。このサハリン探検を指揮したのは、バルト・ドイツ人のシュミット(独: Friedrich

¹⁴ 土肥恒之著(2016).『興亡の世界史 ロシア・ロマノフ王朝の大地』. 講談社学術文庫. 202 頁

Karl Schmidt. 露: Фёдор Богданович Шмидт. 1832-1908)である。彼はエストニアのタルトゥ大学で地質学の学位を得た後、ロシアで研究を行っていた。1859 年にペテルブルクを出発し、アムール川流域やウスリー地方の探検、調査を行った。そして、サハリンには何度も訪れ、詳細な報告書を記した。その中で、サハリンの植生は南北で異なっており、北サハリンはオホーツク海沿岸やカムチャツカと同様の植生が見られるものの、南サハリンは日本固有の植生が見られるため、北緯 48 度を境に、ロシアと日本の国境が定められるべきであり、ここにロシアの地理の境界があると記した。

日本側もたびたびサハリン探検を行っており、1809 年には、江戸幕府の役人であった間宮林蔵(1780-1844)による探検が実施され、サハリンが島であること、ロシアとサハリンの間には海峡(間宮海峡)があることなどが判明した。そして、日本とロシア側のサハリンの帰属をめぐる折衝も何度か行われ、1854 年には日露和親条約が結ばれるに至ったが、問題の先送りがされただけに過ぎず、帰属問題は、1875 年の樺太・千島交換条約の締結を待たなければならなかった。そうした状況において、シュミットによるサハリン探検によって、ロシアの地理的範囲がサハリン北半分に及んでいることが示されたのは、領土の帰属問題において重要であったと考えられる。

さらに、19 世紀には、世界周航探検も行われた。ベーリングによる大北方探検の後、アリューシャン列島やアラスカにはラッコやオットセイ、キツネといった動物が豊富であることが判明し、多くの商人たちが毛皮を求めて、アラスカに入植を始めた。その結果、いくつもの毛皮会社が設立されたのであるが、1799 年には皇帝パーヴェル 1 世の勅許によって、アリューシャン列島やアラスカ各地に点在していた毛皮取引を行うロシア会社が解散させられ、露米会社(ロシア・アメリカ会社)へ整理統合することが定められた¹⁵。しかし、入植地の食糧難が続いたため、露米会社の経営には厳しいものがあつた。食糧難の打破のために考えられたのが、日本との交易であつた。第 3 章のベーリングの探検で見たように、首都ペテルブルクから極東地域に物資を輸送するのは並大抵のことではなく、期間もコストもかかりすぎてしまう。しかし、ロシア極東地域やアラスカに近い日本から物資を輸送すれば効率がよいとの考えであつた。露米会社の運営に当たったレザノフ(Николай Петрович Резанов. 1764-1807)は、1792 年に交わされた遣日使節ラクスマン(Адам Кириллович Лаксман. 1766-没年不詳)と、江戸幕府老中の松平定信(1759-1829)による日露間の国交樹立の約束の履行を要求することを口実に、自ら遣日使節として日本に赴くことに決めた。

そして、レザノフの決心と同時期に、ロシア海軍の士官であつたクルーゼンシュテルン(Иван Фёдорович Крузенштерн. 1770-1846)は、パーヴェル 1 世に世界周航計画を提出し、次の皇帝アレクサンドル 1 世の即位後に、その計画は採択されるに至った。クルーゼンシュテルンは、1793 年にイギリス艦隊に派遣され、優れた訓練を積み、その後は中国やインドに

¹⁵ スティーブン・R・バウン著・小林政子訳(2020).『青狐の島 世界の果てを目指したベーリングと史上最大の科学探検隊』.国書刊行会. 264-266 頁

滞在し、多くの経験を身に着けた。その世界周航計画には、露米会社の運営するアリュージャン列島やアラスカへの生活必需品の供給、日本との通商、航海ルート上の未探査海域の調査、カリフォルニアの植民地化のための事前準備などが盛り込まれていた¹⁶。

1803年7月26日、クロンシュタット港から、ナジェージダ号とネヴァ号の2隻が世界周航の旅へと出発した。レザノフもクルーゼンシュテルンもナジェージダ号に乗り込んでいた。航海中、世界で初めて、水深400メートルまでの各地の水温を計測することが行われた。そして順調に赤道を超え、1804年3月21日、マゼラン海峡を通過し、ロシア艦隊は太平洋に出ることに成功したのであった。その後、イースター島へに立ち寄った後、ハワイに寄港した。そして、ナジェージダ号は、日本との通商の目的を果たすためにカムチャツカに向かい、中国の海岸線を南へ下り、1804年9月に長崎の出島に到着し、レザノフらは江戸幕府との交渉を進めた。1805年4月中頃まで交渉は行われたが、幕府側は、中国、朝鮮、琉球、オランダ以外の国家とは通商関係を持たないとの態度を崩さなかったため、交渉は決裂してしまった。この幕府側の対応に憤慨したレザノフは、部下のニコライ・フヴォストフ(Николай Александрович Хвостов. 1776-1809)に命じて、後にサハリンや千島列島の日本人居住区を襲撃させた(文化露寇)¹⁷。ともあれ、クルーゼンシュテルン、レザノフらが乗り込むナジェージダ号は、日本列島の西海岸、サハリン、千島列島の調査を行うために北上し、カムチャツカでレザノフが下船した後、再び南下した。一方のネヴァ号は、1804年7月にアラスカ南岸へ到達し、そこで越冬した後、1805年9月1日に中国沿岸へと向かった。両船は、1805年12月にマカオで合流し、1806年2月11日出港した。3月5日にはスンダ海峡を越えてインド洋に入ったが、アフリカに接近しようとしているときに、悪天候のため、両船が互いを見失ってしまった。だが、その後の航海は順調に進んだ。ナジェージダ号はセント・ヘレナ島に寄港し、ロシアとフランス間の戦争¹⁸が勃発したという報を聞いた後、イギリスを北側から回ってバルト海を目指すことに決め、1806年8月19日にクロンシュタット港に帰還した。ネヴァ号は、仏露間の開戦の報を聞いたものの、イギリス海峡を越えてクロンシュタット港に戻ることに決めた。そして、ポーツマス港に寄港してからクロンシュタット港に到着した。8月5日のことである。

以上のシベリア探検や世界周航遠征の例から理解できるのは、19世紀のロシアの探検は領土の拡大よりも、拡大した領土の範囲を画定し、その領土内における学術的調査が主眼に置かれるようになったことである。そうした状況において、ロシアの関心は領土の拡大から領土の運営へ、極地から南へと移っていった。

¹⁶ 佐々木路子著(2019).『ロシアの地理的「探検」と「発見」』.之潮. 170-171頁

¹⁷ 藤田覚著(2005).『近世後期政治史と対外関係』.東京大学出版会. 103頁

¹⁸ 1804年のナポレオンの皇帝即位に対して、イギリスの首相ピット(英: William Pitt. 1759-1806)が1805年に提唱して結成された第三次対仏大同盟がきっかけで勃発した。

4-2. ロシアの国内情勢

ロシアの統計学者で地理学者でもあったアルセーニエフ(Константин Иванович Арсеньев, 1789-1865)は、「北は北氷洋、東は太平洋、南はテンシャン、サヤン山脈というように、ロシア帝国の外延的拡大が地理的、物理的制限によって阻まれたとき、それまでの膨張エネルギーは必然的に内的拡充の方向に向けられるだろう」と述べた¹⁹。18世紀には今現在とほぼ同じ領土を手にしてしていたロシアは、19世紀には領土拡大に振り向けていた力を領土内部の拡充に使うようになっていったのである。しかし、極地地域への拡張はストップしたものの、内部の拡充だけでなく、不凍港を手に入れるために、南方地域に対して領土の野心を表すようにもなった。本節では主に、シベリア経営と南下政策の二つを中心に見ていきたい。

ロシア極東地域の国境は、1698年のネルチンスク条約と1727年のキャプタ条約において、中国の清朝との間で画定されてから、大きな変化はなかった。しかし、その間にもシベリアの人口は着実に増加した。18世紀末には120万人が居住しており、ロシア人はそのうちの多数を占めていた。そして20世紀初頭には940万人にまで増加した。18世紀から19世紀にかけてのシベリアでは、毛皮獲得だけでなく、中国との交易による経済活動も行われていた。ロシアは中国から主に茶と絹織物を仕入れており、飲茶の習慣がロシアでも生まれた。湯沸かし器のサモワールが普及したのもこの頃である。この交易で利益を得た商人たちは、前項4-1でも触れた露米会社を設立し、北米大陸でも利益を求めて活動していくことになった。さらに、1853年にはイルクーツク商人らによって、「レナ金産業会社」(Ленские золотые прииски)が設立され、シベリアにおける金の採掘が本格化し²⁰、19世紀末には、ロシアの金の産出の70パーセントをシベリアが担っていた²¹。1861年の農奴解放以来、農民のシベリア移住が盛んになり、加えて政治犯のシベリア流刑などもあり、労働力の増加が加速した結果、産業の発達が可能になった。

シベリアの行政は1819年に二分された。アレクサンドル1世の治世下で辣腕を振るったスペランスキー(Михаил Михайлович Сперанский, 1772-1839)による改革の一環として、西はトボリスク、東はイルクーツクにそれぞれ総督府が置かれ、行政を担当することになった。東シベリア総督に任命されたのは、ロシア地理学協会の一員として、シベリア探検の計画を推し進めるなどの役割を果たしてきたムラヴィヨフであった。ムラヴィヨフの総督着任に前後して、アジア地域では大変動が起こった。1840年から1842年にかけてのアヘン戦争と、それに続くアロー戦争によって、中国は列強諸国に蚕食され、植民地にされるようになったのである。ロシアも機を逃さず、中国側に圧力をかけ、1858年に清朝との間でアイグン条

¹⁹ 細川隆雄「ロシア革命前のシベリア開発とその先覚者達 シベリア開発の理念を求めて」(『農林業問題研究』第12巻第3号, 1976年, 120頁)

²⁰ 土肥恒之著(2016).『興亡の世界史 ロシア・ロマノフ王朝の大地』. 講談社学術文庫, 282頁

²¹ 加藤九祚著(1994).『シベリアの歴史』. 紀伊國屋書店, 110頁

約(愛琿条約)を締結した。ロシアは、アムール川の左岸の領有と、ウスリー川以東の沿海州を露中共同管理とすることを清朝に認めさせ、1860年の北京条約では、沿海州のロシアへの割譲が認められることになった。そして同年、念願の不凍港を獲得したロシアは沿海州に北太平洋、そして極東地域における一大拠点としてウラジオストクを建設し、アジアへの影響力を強めることになった。

極東地域でのロシアの勢力圏拡大が成し遂げられたが、ロシアは諸列強のアジアへの進出という事態に直面することになる。ロシアはシベリア地域における戦略的優位を得るために、シベリア鉄道の建設に着手することとなった。1891年にはアレクサンドル3世によって鉄道建設案が認可され、西はチェリャビンスク、東はウラジオストクから線路の着工が行われた。資材の運搬や、バイカル湖をいかに迂回するのかといった多数の困難に直面しつつも、1901年の10月、モスクワとウラジオストクを13日で結ぶシベリア鉄道が開通したのである。

諸列強の中でも、特にイギリスの動向はロシアに脅威を与え、中央アジアにおいては、英露間で「グレートゲーム」と呼ばれる勢力圏の獲得合戦が行われるに至った。中央アジアは、1847年にはすでに遊牧民の部族連合体であったカザフを併合し、次いでウズベク人国家であるヒヴァ・ハン国、ブハラ・ハン国、コーカンド・ハン国の三ハン国の併合も画策するようになった。1864年、まずはコーカンド・ハン国を攻撃し、1867年に滅ぼした。その首都タシケントにトルキスタン総督府が設置され、1868年にはブハラ・ハン国が、1873年にはヒヴァ・ハン国がそれぞれロシアの保護国となった。中央アジアではイスラーム社会の伝統的制度の解体や強制的なキリスト教への改宗などはあまりなかった²²とされ、比較的寛容な支配であったと言われるが、ロシア化は順調に進展し、ロシア語学校や交通・通信網の整備が進んだ。そして、三ハン国の吸収によって肥沃な土地を得たロシアは、中央アジアにおいて綿花栽培を推し進めるようになった。特にオアシス地帯で水資源が豊富なフェルガナ盆地で、大規模な綿花栽培が行われた。19世紀にはロシアでは綿工業が盛んになっていたが、アメリカ南北戦争の影響で、ロシアに輸入される綿は激減しており、国内での綿の生産が目指されたのである。中央アジアの綿は、ロシアの綿工業を支えるものとして重視されるようになったが、中央アジアのモノカルチャー化が進んだ面も見逃すことはできないだろう。

ロシアは19世紀に勢力圏を拡大した。そして国内では多くの産業が成立し、シベリア地域の役割も大きくなっていった。シベリアは探検する地域から、経営する地域へと変貌したと言っても過言はないだろう。

²² 土肥恒之著(2016).『興亡の世界史 ロシア・ロマノフ王朝の大地』. 講談社学術文庫. 268 頁

5.結論

ロシアの極地探検の性質の変化を考察してきた。19 世紀以前までは、北極海やシベリア地域の探検がなされ、高価な毛皮を追い求めたり、地図の作成や先住民文化の調査を行ったりといったことが行われた。そして 18 世紀には、ロシアは今現在とほぼ同じ領土を手にするに至った。しかし、第 4 章 2 節で述べたアルセーニエフの言葉に代表されるように、領土を地理的限界まで拡大したロシアでは、獲得した領土内の地理的調査や領土の範囲の画定、さらには極地以外の探検や遠征が中心になった。そこには、シベリアの経営や中央アジアにおける影響力の拡大や沿海州の獲得など、いわゆる南下政策が大きくかかわっているのではないかと考えられる。つまり、19 世紀のロシアの探検は、それ以前のものとは比べて、性質が変化したのだと考えられる。それはロシアの極地が探検から経営への場へと変化したことを示しているのだとも言えよう。かつてシベリアに富を求めたコサックたちによって築かれ、ベーリングら探検隊が準備を整えたトボリスクは、19 世紀にはシベリアの行政を担う都市となった。多くの探検隊が物資の輸送に使ったレナ川では、金鉱山の経営がなされるようになった。このことは特筆すべきことではないだろうか。

ロシアの極地探検について述べる本稿は、解明できた点は必ずしも多くはないものの、多少の迂路を辿りながら大まかな結論へと至ることができた。しかし、まだ解決できていない点もある。そもそも、本稿ではロシアを中心に論じてきたが、海外諸国との関わりについて多くを書かなかった。シベリア地域の毛皮を含めた富は、海外へと輸出されていたのだから、対外的な事情も触れなければならないのは論を待たない。そして、19 世紀の探検事情も十分な量の資料を検討したわけではないため、まだまだ修正できる点、考察できる点はいだらう。とにかく、不十分な点が何点か残っている。新たに資料を見つけ、ひも解くことが必要となろう。これらのことは筆者の今後の課題として残っていることは確かである。しかし、これらの課題は多くの探検者が抱えていた困難よりかはるかに小さいものであることも、また確かであるのだ。

参考文献一覧

- ・加藤九祚『シベリアに憑かれた人々』(岩波新書、1974)
- ・加藤九祚『シベリアの歴史』(紀伊國屋書店、1994)
- ・佐々木路子『ロシアの地理的「探検」と「発見」』(之潮、2019)
- ・スティーブン・R・バウン『青狐の島 世界の果てを目指したベーリングと史上最大の科学探検隊』(国書刊行会、2020)
- ・中京大学社会科学研究所ロシア研究部会編『ロシアのシベリア進出史』(成文堂、2011 年)
- ・土肥恒之『興亡の世界史 ロシア・ロマノフ王朝の大地』(講談社学術文庫、2016)
- ・南極 OB 会編集委員会編『北極読本—歴史から自然科学、国際関係まで』(成山堂書店、2015)
- ・藤田覚『近世後期政治史と対外関係』(東京大学出版会、2005)
- ・細川隆雄「ロシア革命前のシベリア開発とその先覚者達 シベリア開発の理念を求めて」(『農林業問題研究』第 12 巻第 3 号、1976 年.)
- ・“中国 北極海でも「一带一路」 権益拡大へ白書発表”. 日本経済新聞. 2018-01-26.
<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO26195000W8A120C1EA1000/>, (閲覧日 2021-12-02)
- ・“年内に脱原発達成のドイツが EU で孤立し始めた訳 エネルギー価格高騰に加え、外交でも苦しい立場”. 東洋経済. 2022-01-21.
<https://toyokeizai.net/articles/-/504519>, (閲覧日 2022-1-27)